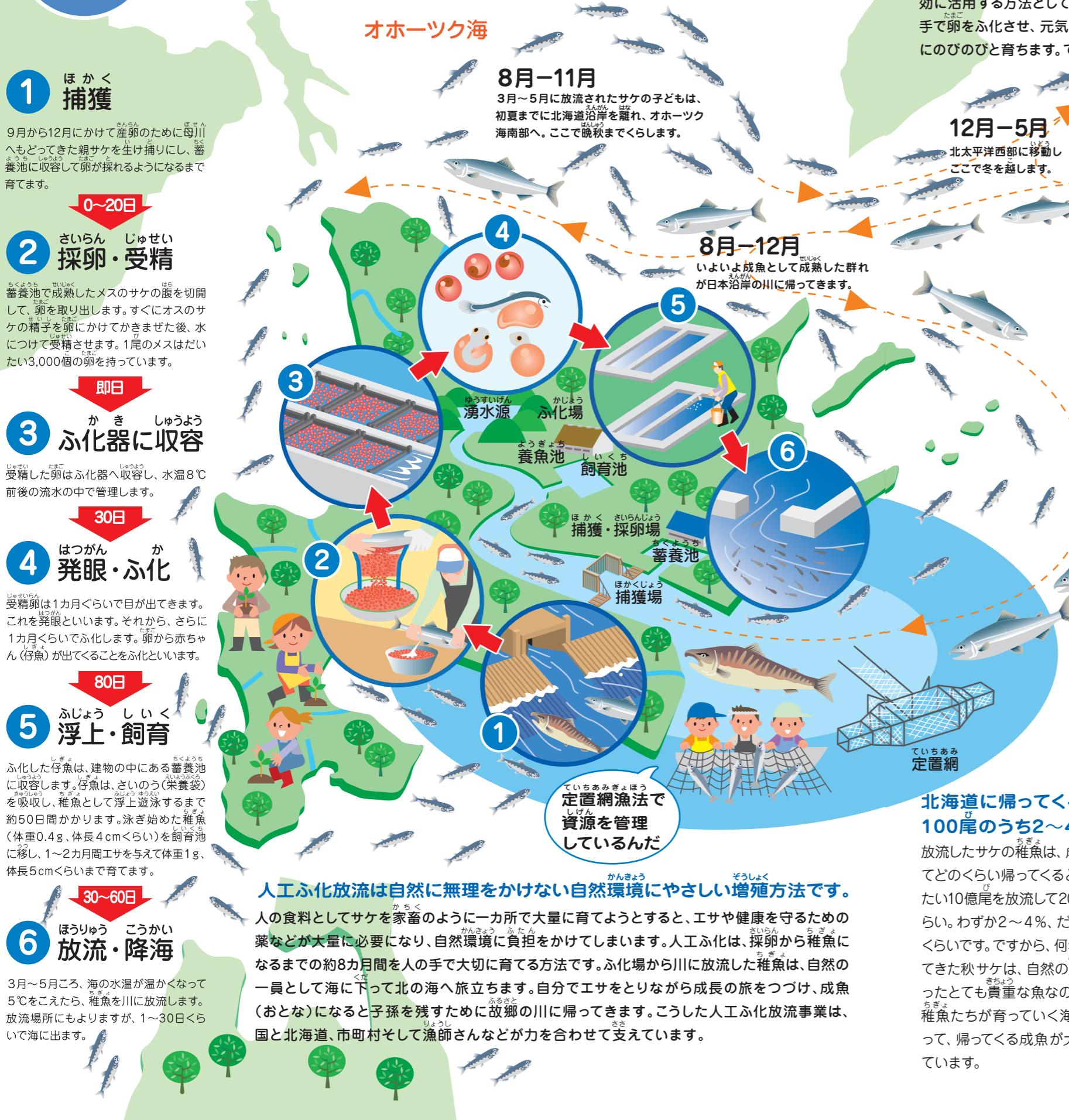


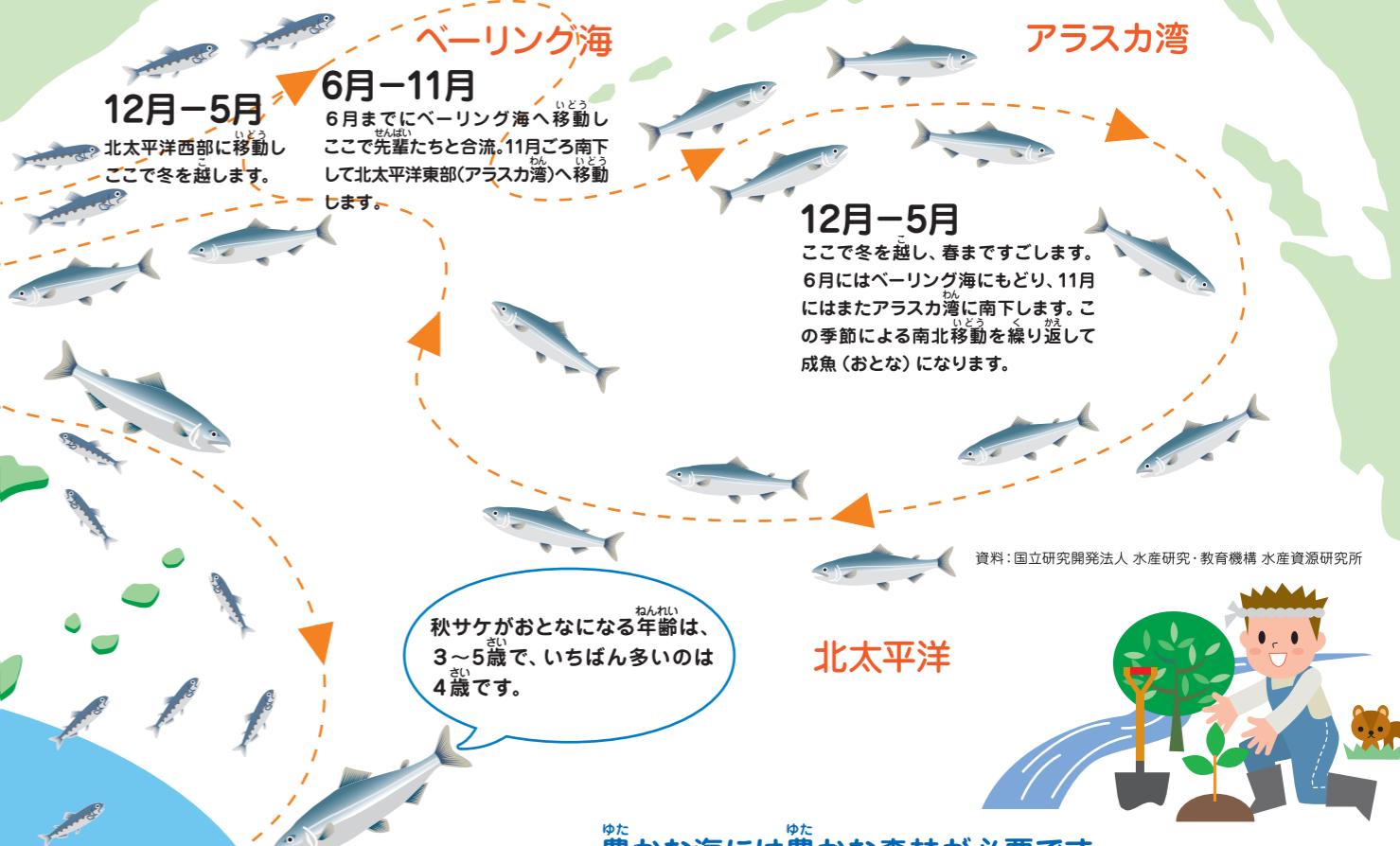


日本の秋サケは元気いっぱい 自然の海を旅して育つんだよ。



人工ふ化放流技術が秋サケを守っています。

4000年前の縄文人のサケ捕獲施設(北海道にある石狩紅葉山49号遺跡)が教えてくれるように、成長して秋になると生まれ育った川に帰ってくるシロザケ(秋サケ)を、人は自然の恵みとして大昔から利用させてもらっていました。でも、時代とともに、特に明治時代からは国土開発や都市化が急速に進み、森林や川、沿岸などの自然環境が悪化して、秋サケは昔のように自分の力で子孫を残すことが難しくなりました。それを心配した先人たちは、自然環境をできるだけ守り、残された自然を有効に活用する方法としての工夫を重ね、ようやくたどり着いたのが自然にあまり負担をかけない現在の人工ふ化放流技術です。人の手で卵をふ化させ、元気な稚魚(子どもの魚)になるまで人が手助けをしてあげる技術です。その後は、川を下って海に出て自由に元気のびのびと育ちます。ですから、人工ふ化放流といって、秋サケは天然育ちそのものなんです。



豊かな海には豊かな森林が必要です。

森林はたくわえた水を栄養(有機物)とともに川や湖そして海に供給するだけでなく、秋サケの人工ふ化放流事業にとっても欠かせません。河畔林(川の周囲にある木々)の落ち葉も、川や海の栄養源です。森林は魚を引き寄せる「魚つき林」として昔から知られており、漁師さんや浜のお母さんたちは100年計画で木を植え続けています。大好きなイクラやサケ料理がみんなの子孫も食べられるよう協力してくださいね。

秋サケの人工ふ化放流数と沿岸来遊数(もどってきた数)

